

管理栄養士臨地実習ノートの書き方

ー臨地実習事前授業での取り組みー

甲田 道子^{*1}・田中 守^{*1}・大西 律子^{*2}・佐久間 直緒美^{*1}・香西 はな^{*2}・
近藤 文^{*2}・山中 由実^{*3}・橋本 里穂^{*4}・関川 達志^{*4}・渡邊 章子^{*4}・前野 善孝^{*5}

要 旨

3年生を臨地実習に送り出す前の事前演習（全15回）で、「ノートの書き方」に重点を置き2年間指導した。臨地実習で実際に使用するノートの形式に慣れてもらうために、実習ノートを模倣したA4サイズの手紙2枚を事前演習で毎回配付した。1枚は授業のメモとして、もう1枚には授業で学んだことのまとめを記入させた。また、良くない例文を提示し、どのように修正加筆すればよいのか具体的に説明した。その結果2023年度実習生の「ノートの書き方」への実習施設からの評価は、前年2022年度の実習生よりも有意ではなかったものの高かった。今回の指導で一定の成果があったと考えている。しかし、2024年度は自分の意見や感想を書けない学生が多かったことから、継続して指導していく必要がある。

キーワード

実習ノートの書き方、臨地実習事前授業

1 臨地実習の概要と事前指導

管理栄養科学専攻では、栄養士免許および管理栄養士の国家試験受験資格を取得することができる。カリキュラムでは校外の臨地実習が必須科目となっていて、学生は管理栄養士の働く現場に赴いて実習を行う¹⁾。臨地実習は、A：給食の運営（校外実習）、B：臨床栄養学、C：給食経営管理論、D：公衆栄養学の4分野にわたっている。実習期間は、多くの学生は、A（事業所）で1週間、B（病院）で2週間、C（福祉施設）あるいはD（保健所、健康増進施設）で1週間の合計4週間である。臨地実習の内容は、それぞれの分野特有の目標に則し、かつ、専門的な知識および技術の統合を図ることに留意したものである。いずれの臨地実習でも、学生は本学指定の実習ノートを持参し、毎日の活動内容、学んだことや気づきを記録する。

本学では、基本的には、3年生の8-9月と2-3月に学生を臨地実習に出している。そのため、3年次春学期に「臨地実習演習」（全15回）を設け、臨地実習に行く準備をさせている。授業の概要および到達目標を表1に示した。この中には、臨地実習が効果的で効率的に進むことをねらいとして、臨地実習施設の指導者と学生との面談が含まれている。管理栄養科学専攻では、毎年臨地実習施設の管理栄養士を招いて臨地実習

指導者会議を開催している。その機会を利用して、学生との面談を設定し、指導者側からは実習の心構えについて話し、実習生からは臨地実習に関する質問をして交流を図っている。2023年度は20名、2024年度は24

表1 臨地実習演習の主旨（概要）および達成目標
（シラバスから抜粋）

【授業の主旨（概要）】
1. 臨地実習の意義を理解し、学習効果の高い学外実習とすることを目的とする。
2. 講義・実習を通じて学んだ理論や実技を実際の場で施行すること（臨地実習）は、経験となり自分の力となる貴重な機会である。実習の目的を理解し、効果的な臨地実習になるように学習する。
3. また、実習を通じて得た経験により専門機能に関する理解を深め意欲を高められるよう、実習終了後に行うレポート作成、実習報告・意見交換に関する方法や内容について学習する。
【具体的達成目標】
1. 臨地実習の目的・目標を十分に理解し、実習先ごとの実習の目的、課題を明確に示すことができる
2. 臨地実習中に課題に積極的に臨めるよう課題に関して事前準備ができている
3. 実習中・後、実習先で得た知識や技術を整理しまとめることができる
4. 管理栄養士の役割や業務について理解を深め、説明することができる
5. 管理栄養士としての活躍に向けて、学習に関して今まで以上の積極的な取り組みとなる

*1 応用生物学部 食品栄養科学科 管理栄養科学専攻 准教授
*3 応用生物学部 食品栄養科学科 管理栄養科学専攻 助教
*5 応用生物学部 食品栄養科学科 管理栄養科学専攻 教授

*2 応用生物学部 食品栄養科学科 管理栄養科学専攻 講師
*4 応用生物学部 食品栄養科学科 管理栄養科学専攻 助手

名の指導者が出席した。一方、授業では、病院や事業所の管理栄養士を招聘し、それぞれ現場での業務内容ややりがい等について講義してもらっている。さらに、2023年度および2024年度は、重点目標として「ノートの書き方」の指導を行った。本学に限らず、「記載が少ない」「実習内容の概要しか記載されていない」「何を学んだのか、何に興味を持っているのか、いろいろなことを書いてほしい」など実習生はノートが書けないと臨地実習先から指摘されることが多い²⁾。今回は本学での取り組みと成果について報告する。

2 指導方法

実習ノートの形式に慣れることとメモを取る習慣を付けることを目的として、毎回実習ノートと同じ形式の用紙(図1)を配付することにした。1枚目(実習

ノートの左ページ）は授業開始時に配り、講義内容をメモさせた。2枚目（同右ページ）は授業終了10～15分前に配り、講義で学んだことをまとめ、5段階で自己評価する時間とした。用紙は各自のファイルに綴じさせた。

表2は基本的なノートの書き方として指導している内容である。具体例を提示して指導した。この他に、過去の学生の実習ノートを参考にして悪い例を作成し、それをどのように修正すれば良いのか考えさせ、解答例を示した。また、授業期間の途中で用紙（ノート）を綴じたファイルを回収した。次回の授業までに教員が大まかに目を通し、問題点について個別に簡単に指摘して返却した。

2024年は、基本的には2023年度の指導を踏襲したが、実習ノートの右ページのタイトルを「反省・意見」から「今日学んだこと・反省」に変更した。学生の中には、「意見」を文字面のまま捉えてしまい、実習施設への批判や意見するような事を記入する学生が出てきたからである。

表2 実習ノートの書き方

- (1) 基本的な書き方
 1. 黒ボールペンを使用(鉛筆はNG)
 2. 間違ひの訂正 ①定規で二重線 ②印鑑を押す
 3. 水平に書く(斜めはNG)
 4. 9割は書く(字の大きさ、レイアウトを考える)
 5. 行ったことを ①具体的に ②まんべんなく書く
 6. 感想は控える
 7. 話し言葉を使わない
- (2) 実習ノートを書くコツ
 1. 1つの文章を短く書く
 2. もう一步踏み込んで書く
- (3) 「今日学んだこと・まとめ」の書き方
 1. 行ったこと、学んだこと、「気づき」を具体的に書く
 2. 自分のことばで書く
 3. 感想は控える。言い換える
 4. 実習先や先生への批判はしない
 5. 話し言葉を使わない

3 成果と考察

各実習生のノートの書き方の評価は、臨地実習先の指導者から返却された臨地実習評価票を基にした。評価票にはいくつか評価項目があり、それぞれA（良い）、B（やや良い）、C（どちらともいえない）、D（やや悪い）、E（悪い）の5段階で評価してもらっている。今回の取り組みの成果を確かめるために、その中の「実習中のノートの提出および内容」での評価を2022年度と2023年度とを比較した（図2）。なお、人数は延べ人数であり、同一の学生が異なる2施設で実習をする場合もあった。2023年度8-9月実習では、実習生の50%がA評価となり、前年よりも有意ではないものの高かった。今回の指導で一定の成果があったと考えている。

[illegible]

図1 毎回配付したノートを模した記録用紙

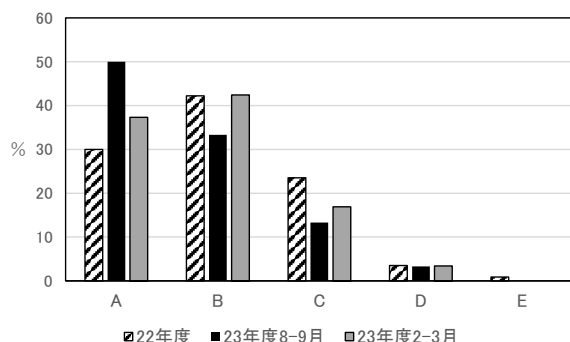


図2 実習施設からの「ノートの書き方」の評価

* A：良い、B：やや良い、C：どちらともいえない、
D：やや悪い、E：悪い

次に、8-9月と2-3月実習で比較した結果、2-3月ではAよりB評価の割合が高かった。2-3月で評価が低下した要因として、学生によるバイアスが考えられる。単位未取得のため8-9月は実習に行くことができなかった学生は2-3月から実習が始まった、また、春学期の授業から時間が経ち、同じ学生であってもノートを書くポイントなどの記憶が薄れてしまった可能性もある。

2024年度の状況は授業期間の途中で回収したファイルから検討した。メモに関しては、学生間で丁寧さに差はあったものの、全員が取ることはできていた。しかし、考察が書かれていなかった学生が半数近くいた。また、記述が用紙の8割にも満たず、「何を書いたら良いのかわからない」と質問する学生もいた。

4 今後の課題

渡邊（2024）は「学生と接する時の基本」^{3）}として、①助言は具体的に、②なぜそうするのかを説明する、③できたときに評価する等の項目を挙げている。今回の取り組み「ノートの書き方」ではより具体的に示そうと心がけた。その結果、2023年度8-9月実習では効果があったと推察された。しかし、2024年度では考察を書いていない学生が多かった。わずか1回の講義だけでは、学生がそれを習得することは難しい。学生は1年次から各種実習や実験のレポートを書き、その度に「考察」部分を明瞭で論理的に書くように指導されているはずである。学生は、科学的なレポートと臨地実習のノートとは別のものだとは認識しているのかどうかは不明であるが、臨地実習ノートの「考察」にあたる部分が書けない学生が多かった。

この現状から見えてきたのは、「学び」とは何を意味するのかを理解していない学生が多いのではないかとすることである。「今日のまとめ」には、何を学んだのか、そこからどう考えたのかを書いてもらいたい。しかし、その日の講義で提示された情報を単に要約す

るにとどまり、それを「学び」としている学生が多かった。そこには、考察はない。もう一步踏み込んでほしい。今後は、「学ぶ」とはどういうことなのかを学生に考えさせながら、もう一步の踏み込み方を具体的に教えていく必要がある。

学生は毎年変わる。今回の取り組みを通して、指導内容を見直しながら根気よく継続指導することが重要であることを指導する側として我々は学んだ。

参考文献

- 1) 日本栄養士会・全国栄養士養成施設協会編. 臨地実習及び校外実習の実際. 2014年版. 2014. 全国栄養士養成施設協会. 東京
- 2) 古橋啓子ら. 栄養総合演習Ⅰ・Ⅱにおける「臨地実習ノート・報告書チェック表」の活用. 東海学園大学教育研究紀要. 5: 91-98, 2021
- 3) 渡邊素子. 「不安定な情勢下での学生対応、多様化の進む学生の特徴と接し方」中部大学第157回キャリアアッププログラム. 2024年9月4日（配布資料）

How to write a registered dietitian practice notebook — Pre-learning class initiatives for field training —

KODA Michiko^{*}, TANAKA Mamoru^{*1}, OHNISHI Ritsuko^{*2}, SAKUMA Naomi^{*1},
KOZAI Hana^{*2}, KONDO Fumi^{*2}, YAMANAKA Yumi^{*3}, HASHIMOTO Riho^{*4},
SEKIGAWA Tatsushi^{*4}, WATANABE Akiko^{*4}, and MAENO Yoshitaka^{*5}

- *1 Associate Professor, Department of Health and Nutritional Science, College of Bioscience and Biotechnology, Chubu University
- *2 Senior Assistant Professor, Department of Health and Nutritional Science, College of Bioscience and Biotechnology, Chubu University
- *3 Assistant Professor, Department of Health and Nutritional Science, College of Bioscience and Biotechnology, Chubu University
- *4 Research Associate, Department of Health and Nutritional Science, College of Bioscience and Biotechnology, Chubu University
- *5 Professor, Department of Health and Nutritional Science, College of Bioscience and Biotechnology, Chubu University

Abstract

In the pre-exercises (15 sessions in total) conducted before sending third-year students off for clinical training, we focused on "how to write notes" for two years. In order to get them used to the format of the notes they will actually use in their practice as registered dietitians, two A4-sized sheets of paper that imitated practice notebooks were handed out at each pre-exercise session, one to be used to take class notes and the other to summarize what was learned in class. In addition, we presented examples of poor sentences and specifically explained how the trainees should correct and add to them. As a result, the 2023 trainees' "note-taking" was rated higher than that of the 2022 trainees by the training facilities, although the difference was not significant. We consider that this teaching had a certain level of success. However, since many students in 2024 were unable to write their own opinions and impressions, it is necessary to continue providing such instruction.

Key words

note-taking, registered dietitian training